

2 遊びから子どもの育つ環境を考えるシンポジウム

- 1 開催日時 平成26年2月15日(土) 午後2時から午後4時40分
- 2 開催場所 小田原市民会館6階 第6・7会議室
- 3 参加者数 82名

① オープニング (映像資料視聴・意見交換)

オープニングとして、来場者に、子どもたちの遊びの環境の変化を感じてもらうため、5分ほど昭和30年代の子どもが遊んでいる映像『昭和30年代の日本・家族の生活「都会の子ども達編」』（桜映画社）を視聴してもらい、その後近くの席の人と意見交換してもらった。

② 基調講演 「子どもの遊び場と子どもの育つ環境」

公益社団法人こども環境学会代表理事、東京工業大学名誉教授 仙田 満

【講演要旨】

1 遊び環境は成育環境

50年前の遊び環境に比べて、遊び場は急激に減ってしまっている。

子どもの遊びの4要素は「遊び場」、「遊び方法」、「遊び時間」、「遊び集団」である。

遊びは勉強・労働の反対のイメージがあるが、遊びは、ただ遊興的な意味の遊びではなく、子どもにとって、育ちそのものであり、必要な能力を獲得するプロセスそのものである。

遊びの条件は「自由であること」、「楽しいこと」、「無償であること」、「繰り返されること」である。

2 遊びは身体性・社会性・感性・創造性を開発し、意識・挑戦性を育む。

統計によると子どもの体格は良くなっている（1960年から2010年の50年間で体重13%増。）が、運動能力は低下している。原因としてはテレビ、テレビゲームの影響で外で遊ぶ時間が減っていることが考えられる。（1日15分。）1日1時間は必要と言われている。

3 あそび・学習・運動・交流・創造・意欲はパラレルだ

藤沢市の事例では、1965年にやる気、学習意欲が65%であったのが、2010年には25%に低下した。また、15歳の子どもに「孤独かどうか」アンケートしたところ東京では30%が孤独と回答したのに対し、OECDの各国では5%から10%であった。



4 遊びは空間だけではなく、人が必要

公園利用率が低下している。公園のフィールドがあっても子どもが遊んでいない。公園は誘拐や犯罪の危険のある危険な場所というイメージになってしまった。

大人のプレイリーダーのいるプレイパークは利用時間、利用回数多く、安全性の評価が高い。公園も人が必要な時代となっている。

5 自然遊び、自然体験の中でリスクを学ぶ

遊びの原風景になりうるもの、例えば今日のように雪が積もると、子ども達は外で雪だるまを作ったりしていつもと違う体験ができ、まち全体が遊び場になる。

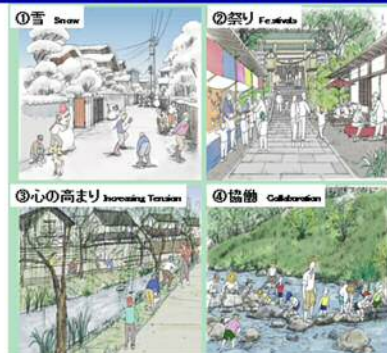
祭りは楽しい反面、けんか等の危険もあり、その中で学ぶものもある。

こども環境学会では、子どもの遊び空間として

6つの原風景に整理している。

- (1) 「自然スペース」池、野原など
- (2) 「オープンスペース」公園など
- (3) 「道スペース」
- (4) 「アナーキースペース」混乱に満ちたもの、プレイパークなど
- (5) 「アジトスペース」秘密基地など
- (6) 「遊具スペース」

原風景になりうる契機 Likely Elements of Primary Scenery



あそび空間の6原空間



6 脳科学的に8歳までに多様な体験をすることが必要

走る・跳ぶなどの筋力は20歳ぐらいまで発達するが、神経系の発達には8歳ぐらいで90%ぐらい完成する。視覚的情報（テレビなど）だけでは、身体的発達に寄与しない。

3~4歳までベビーカーに乗せていることが見受けられるが、歩ける子どもは歩いたほうが良い。中枢神経の発達のために子どもは大地と接することが重要。幼稚園などでけがが多いのはこの神経系の発達不足のため。広くて起伏のある園庭の幼稚園の子どもは片足ケンケンが200mぐらいできるのに対して、狭い園庭の幼稚園は20mぐらいしかできない。子どもを元気にするため子どもが多様な運動ができるような環境を構築する必要がある。

7 空間・時間・方法・コミュニティを正常化させる。

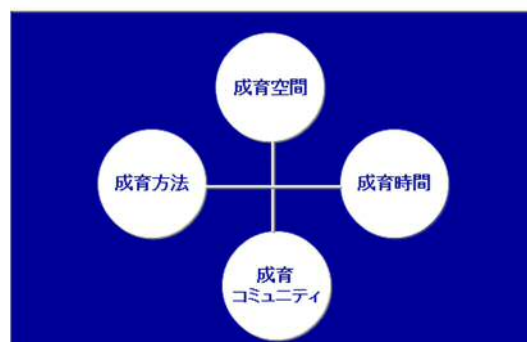
子供の成育環境の視点としては「成育空間」「成育時間」「成育方法」「成育コミュニティ」がある。

昔と比べると遊び空間が少なくなってしまった。

テレビの普及により、1965年を境に外遊びの時間と内遊びの時間が逆転した。

建築物での事例だが、小学校を4階建てにしたため、

こどもの成育環境の視点



自由時間に校庭で遊びにくくなり、校舎に閉じ込めてしまった。(遊び空間の連絡性がなくなった。)

- 8 子どもにとって必要な知恵「仲直りする、助け合う」は幼稚園の砂場から学ぶ
子どもは、幼稚園の砂場でケンカしたり、仲直りすることで社会性を学んでいく。
大人の責任としてそういった場を用意することが重要である。
- 9 困難を乗り越える人となるこどもの育ち
東日本大震災のように、日本は地震がいつくるか分からない。災害の際には子どもがいろいろな困難を乗り越えていく力が必要である。
困難を乗り越えてるような子どもに育つために、遊びをはじめ、多様な体験や自然体験の場が必要である。

10 群れて遊ぶ場

昔は年長の子が遊びやそれに伴う危険を年少の子どもに伝えていた。集団で遊ぶことがなくなって、遊びを伝える人がいなくなった。子ども達の文化の継承には人が必要である。



11 多くの大人に見守られながら育つ環境

子どもの集団がなくなっているので、地域社会の大人たちが子どもの成育にかかわっていく必要がある。

12 レジリエント（困難を乗り越える力）な子どもにやさしいまち

子どもの環境を「建築・都市・造園」という面と「教育・保育」という面と「医療・保健・公衆衛生」の3点から総合的に研究・デザインする。

若い父親に子育てしやすいまちはどこか聞かれた。子どもを育てやすい所に引っ越したいという親は多い。こども環境学会でも現在、子どもにやさしいまちの評価を行っている。また、子どもが第一とする運動をやっていきたい。



こどもは親を選べないのと同様、生きる場を選べない。生きる場を用意する大人達の責任は重い。こども達の未来は日本の未来でもある。私達は、こどもを第一とする社会を築かねばならない。

まとめ

今、日本のこどもたちの成育環境は危機的だ

1. あそび環境は成育環境
2. あそびは身体性、社会性、感性、創造性を開発し、意欲、挑戦性を育む
3. あそび、学習、運動、交流、創造意欲はバラレルだ
4. あそびには空間だけでなく、人が必要
5. 自然あそび、自然体験の中でリスクを学ぶ
6. 脳科学的に、8歳までに多様な体験をすることが重要
7. 空間、時間、方法、コミュニティを正常化させる
8. 子どもにとって必要な知恵「仲直りする、助け合う」は、幼稚園の砂場で学ぶ
9. 困難を乗り越える人となるこどもの育ち
10. 群れて遊ぶ場
11. 多くの大人に見守られながら育つ環境
12. レジリエントな子どもにやさしい都市を
—こどもを第一とする運動

【この講演から気づいたこと・ヒント】

遊びは子どもたちにとって生活そのものであり、子どもの成長や子どもの能力の開発に必須のものであるが、子どもを取り巻く環境は劣化しており、子どもを元気にするために子ども環境を再構築する必要がある。

その方法として、子どもが異なった学年も含む集団で、自由に、多様な運動ができるようにしたり、自然体験をする場を設けることが考えられる。

しかしながら、ただ場を作るだけでなく、地域社会の大人たちが子どもの成育にかかわっていくことが重要である。